

2006年 5月29・30日(月・火) —第1回—

庄内環境創造型農業推進会議 田んぼの生きもの調査



中学生がおそろおそろ田んぼに
入って調査

調査日時：5月29-30日

参加人数：約130名

参加団体：藤島中学校 / 庄内総合支庁、鶴岡市藤島庁舎など地域行政 / JA庄内たがわ、みずほ有機、庄内協同ファームなど栽培者グループ / 東北公益分科大学など調査・支援グループ

調査地点：冬期湛水・無農薬田(鷲畑地区、志藤正一さん)、有機栽培田(三和地区、相馬一廣さん) 慣行栽培田(三和地区、太田忠さん)、減農薬田(長沼地区、山下安善さん)

調査項目：基礎調査、棲息環境調査、イトミミズ・ユスリカ調査、コドラート調査、カエル調査、魚調査(魚網かけ)

内外から130名が調査に集合。

地域の有機農業への認知度もアップ。

今年最初の調査は、昨年の東栄小学校に続いて藤島中学校の総合学習「キャリア教育実践プロジェクト」の一環として2日間にわたって行なわれました。1年生4クラス106名のほか諸団体あわせて130名余りが参加しました。岩淵氏の講義など座学と、実際の調査、さらに発表も行ないました。家が農家であっても、機械化が進み、子どもが田んぼに入るとは少なくなりました。地元の中生たちも泥田の感触に歓声をあげていました。

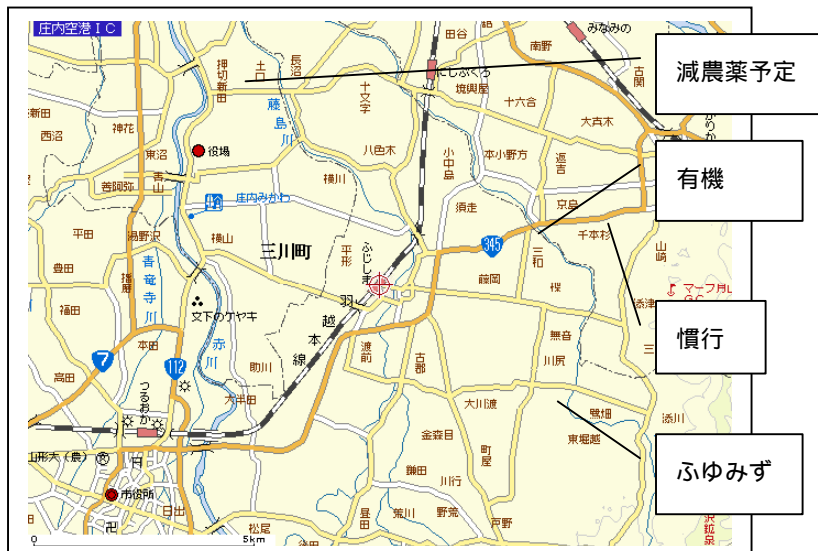
昨年から調査ほ場を提供している庄内協同ファームの志藤正一さんは「中学生たちは慎重に調査をやりとげてくれました。事前の学習会で、調査への関心が高かったことが大きいのでは」と話しています。

「肌で感じることで、食べものや環境、農業への理解が広がると思います。人任せではなく農家自身が立ち上がらないといけませんね」(志藤さん)

同、白澤吉博さんは「130人余りが一斉に活動することで、地域の認知度も高まりました。消費者や生産者、行政との協力体制の確立など、初期の目標はほぼ達成です」と話していました。

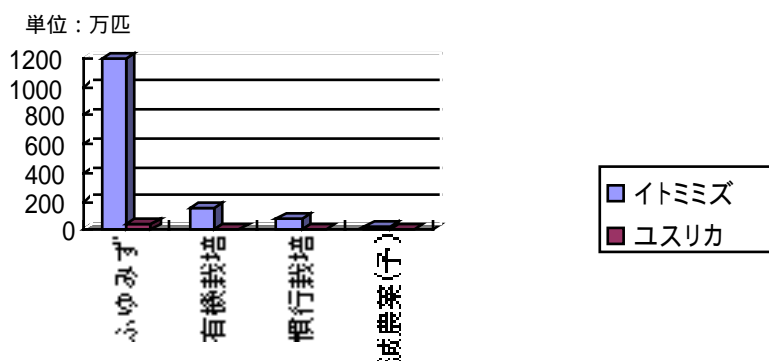
庄内環境創造型農業推進会議

紹介：地域の多くの栽培者グループ、大学など調査・支援グループ、地域行政などの団体で組織される。冬期湛水ほ場や、地域のほ場において、生物多様性、土壌、稲の生育の関連性を調査し、稲作技術に役立っています。庄内地区での環境創造型農業の推進を目的に、活動を続けています。



結果発表！

	調査項目	ふゆみず田んぼ	有機栽培	慣行栽培	減農薬(予定)
土のなかの生きもの調査 (10aあたり匹)	イトミミズ	1195万	155万	80万	20万
	ユスリカ(幼虫)	45万	10万	5万	0万
生息環境調査	調査時刻	16～17時	15～16時	16～17時	11:19
	天気	曇り	曇り	曇り	曇り
	風	無風	弱風	弱風	弱風
	気温()	18.0	19.8	18.4	17.3
	水温()	21.6	22.0	19.8	21.3
	水深(cm)	3.5	6.0		7.0
	pH(酸度)	7.29	8.21/6.86	6.6/5.4	8.05
	EC(電気伝導度, mS)	0.075	0.037	0.050	0.057
	DO(溶存酸素量, ml/l)	10.5	19.6	11.2	8.7
	ORP(酸化還元電位, mV)	-68.4	-110.8	60.2	-94.0
この表の調査日は2006年5月29-30日					



生産者、志藤正一さんの解説を熱心に聞く

中学生のみなさん

見つけた生きものたち

冬期湛水：ドブシジミ、カイエビ、ヒル、ミズアブ、その他
 無農薬：ドブシジミ、ヒル、ゴマフガムシ、ヨーロッパカブトエビ
 慣行：マルタニシ、ドブシジミ、ヒルなど
 減農薬：ドブシジミ、ガムシ、ゲンゴロウ、タニシ、ヒル、カワニナ(魚網)



アイガモ農法の田んぼ

データを読む 岩淵成紀先生

イトミミズの数、無農薬田は冬期湛水田の10分の1、慣行田は100分の1でした。生きものと一緒に作物を作ることが安心・安全につながります。

< 1組・冬期湛水田 > 「不明」の生きもの数を記録しているのが素晴らしい。科学者も分からないことは不明とするのが基本です。

< 2組・無農薬田 > 泥の表面の草を取ってくれるヨーロッパカブトエビが見つかりました。イネミズゾウムシが見つかったが、カエルもたくさんいたので退治してくれるでしょう。

< 3組・慣行田 > 畦道にムラサキサギゴケやオオジシバリが咲き乱れお花畑のようでした。

< 4組・減農薬田(予定) > 魚網にカワニナがたくさん入っていました。蛍の餌なので夏はホタルが舞うかもしれません。